

異分野にこそ、新しい発想のタネがある。人材マネジメントや経営学以外の学問、企業以外の人や組織を扱った本に、学びを探ります。

## 「主語がないから非論理的」は本当か

本書の著者、月本洋氏はもともと人工知能の研究者であり、「内蔵辞書に頼らずに、人の言葉を理解する人工知能を作りたい」という関心から言語の研究を深めてきた。そんな理系研究者が、「主語が省略される日本語は、論理的ではない」という一般に流布する言説に、真っ向から反論を試みたのが本書だ。

まず「主語が省略されるから非論理的」と言うが、必ず主語をもたなければならない「主語強要言語」は、世界にどのくらいあるのだろうか。英語、ドイツ語、フランス語など欧州の8つ程度の言語で、話者の数も10億人程度にすぎないという説が紹介される。日本語のように主語を強要されない言語は、実は世界では多数派なのだ。

主語を省略しない英語は「主体の論理」が中心になっていると月本氏は説く。それが証拠に、英語は無生物主語が多用される。

The wind opened the door. (風が

戸を開けた。日本語なら「風で戸が開いた」が自然な表現だろう)

What brings you here? (何があなたをここに持ってきたのか。日本語訳は「どういう訳で、ここに来たのか」) などなど。英語は主体の論理中心で、擬人の比喩が多用されるのだ。

次に「日本語の論理は特殊で、西洋人には理解できない」という主張にも月本氏は反論する。西洋の学問に古典論理という分野があり、そのなかに命題論理\*という分野がある。この命題論理こそが、日本語でよく使われる論理だというのだ。読者の皆さんは学校の数学で、集合を学んでいないだろうか。2つ以上の重なった輪で描かれる「ベン図」や「かつ」「または」が出てくる、あれだ。その集合で使われる論理と命題論理は、ほぼイコール。ベン図の、輪で区切られた部分とはつまり、容器の比喩であり、「日本語は容器の論理、容器の比喩がよく使われるのです」と月本氏は説く。



\*命題とは、その内容が真か偽、いずれかに判断される文をいう。個々の命題を結合する「かつ」「または」「ならば」「でない」などの関係を記号化し、複合された命題を研究する学問。

### 『日本語は論理的である』

著者/月本 洋  
講談社選書メチエ 1575円(税込)  
2009年7月刊行

著者について



月本 洋氏

東京電機大学工学部  
教授

Tsukimoto Hiroshi\_1955年東京都生まれ。東京大学工学部計数工学科卒業。同大学院修士課程修了。工学博士。専攻は人工知能。

要するに日本語の論理は、西洋生まれの古典論理の一部である命題論理で説明することができ、西洋人が理解できないような特殊な論理ではないということになる。

日本語と英語が主に用いる論理の違いを踏まえたくて、本書は後半に進む。そこでは脳科学の知見も引用しながら、小学校での英語教育に反対する論陣が展開される。「小学生は日本語を母語にしている過程にあり、小学校での英語教育は、日本語習得を阻害してしまう」というのだ。残念ながら紙幅も尽きたので、論証の詳細はぜひ本書をお読みいただきたい。

言語は、あらゆる文化のベースになるものだ。人事や育成に関するいろいろな仕組みも、言語という土台の上に築かれた構造物の1つだろう。「英語は論理的で、日本語は非論理的」と単純に決めつけるのではなく、それぞれの言語が拠って立つ論理に、どんな違いがあるのか。本書を通じて大づかみしておくことは、欧米の諸制度を導入したり、日本企業向けにアレンジしたりする際に、1つの視点を与えてくれるのではないだろうか。